

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長

世界をつなぐ若い力



NPT 再検討会議ユースフォーラムに参加する
平和首長会議ユース



国連を訪問する
平和首長会議ユース



国連で中満事務次長へ
「核兵器禁止条約」の早期締結を求める
署名を渡す平和首長会議ユース



UNICEF を訪問する
平和首長会議ユース



外国人観光客に被爆の実相を伝えるユースピースボランティア

目次

- | | | | |
|---|---|--------------------------------|---|
| 写真:世界をつなぐ若い力 | ① | 核軍縮を訴える平和首長会議代表団の派遣 | ⑤ |
| 「被爆の実相こそ核軍縮議論の核心」(古山彰子) | ② | 私の覚え書き「世界から見た広島」(延本充弘)／ | |
| 被爆体験記「私の被爆体験、黒い雨」(迫田勲) | ③ | 「ひろしま留学生基金」にご協力をお願いします／ | |
| 「被爆80周年を契機とした19の取組の展開」は何が背景となっているのか(谷史郎) .. | ④ | 「広島市・安芸郡外国人相談窓口」をご利用ください | ⑧ |





被爆の実相こそ 核軍縮議論の核心

古山 彰子
NHK 長崎放送局記者

今年2月、東京から大阪方面に向かう新幹線の車内でのことだ。窓越しに雪化粧した富士山が見えた。夕日に照らされた姿が何とも美しく、思わず隣にいた外国人女性に「富士山ですよ」と声をかけた。インドから家族旅行で訪れたこの女性は、今夜は京都に泊まり、その後は広島まで足を延ばすという。

「なぜ広島に？」と尋ねると、平和記念資料館の訪問が目的だという。思い切って「インドの核兵器保有についてどう思うか？」と質問すると、こんな答えが返ってきた。「核兵器を保有すること自体に問題はない。ほとんどの国が保有しているではないか。問題は使用しないことだ」。

少数派が唱える「核抑止」論

実際、「ほとんどの国が核兵器を保有している」というのは事実誤認だ。現在、核兵器を保有しているのは、NPT（核兵器不拡散条約）で「核兵器国」と定められたアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国に加え、NPT非加盟国であるイスラエル、インド、パキスタン、そして一方的に脱退を表明した北朝鮮の計9ヵ国である。また、日本をはじめとする核兵器国に頼る安全保障政策を採用する「核傘下国」などと呼ばれる国が34ヵ国ある。世界の国の数は200ヵ国ほどなので、「核兵器を保有する国」と「核兵器に頼る国」（計43ヵ国）は世界的に見ると少数派だ。

これらの国は、核兵器の使用という威嚇によって敵に攻撃を思いとどまらせる「核抑止」という戦略を採用している。威嚇の先にある核兵器の使用に関しては、広島と長崎への原爆投下がもたらした惨状から、核兵器は無差別に大量の人間を殺傷する兵器であること、そして被爆者は何十年にもわたって後遺症などの健康被害だけでなく、差別や偏見にも苦しむことがわかっている。核保有国が自発的に核兵器を使用する場合でなくても、不慮の事故で核兵器が爆発すれば、その影響は国境を越えて拡散する。

つまり、「核抑止」戦略を採用していない世界の大多数の国にとって、核兵器は安全保障の手段ではなく、自国民の命を脅かす兵器でしかないのだ。

多数派が唱える「人道イニシアティブ」

2010年ごろ、軍縮外交を牽引するオーストリアなどの外交官、研究者、NGOの専門家などをメンバーとする小さなグループは、核兵器が人道におよぼす影響に焦点を当てながら、核兵器をめぐる議論の枠組みを再構築し始めた。これがのちに、「人道イニシアティブ」

〔こやま しょうこ〕

2011年NHK入局。広島放送局、報道局国際部、欧州総局（パリ）、国際放送局を経て2024年より現職。共訳書に「核兵器禁止条約『人道イニシアティブ』という歩み」（アレクサンダー・クメント著、古山彰子・林昌宏訳）（白水社、2024年）。

として広く認知されるようになるアプローチだ。

このアプローチは核保有国が定めた既存の秩序に疑問を投げかけながら、国際世論に大きなうねりを生み出した。それを基盤に、7年後には世界の大多数（122の国と地域）の賛成をもって、核兵器禁止条約が採択された（2021年発効）。

被爆の実相を紡ぐ

私は記者としてこの過程を追い、国際会議で被爆者が被爆の実相を訴える姿を取材してきた。その1人が、長崎の被爆者で日本被団協＝日本原水爆被害者団体協議会の事務局次長の和田征子さんだ（81）。

被爆当時1歳10ヵ月だった和田さんは、母親から聞いた話をもとに証言活動をされている。自宅が山陰にあったため家族は無事だったが、近くには全身にやけどを負った人たちが次々と避難してきた。また、自宅の隣にあった空き地は、遺体を焼く場所として使用されたという。

私が和田さんを最初に取材したのは2016年だった。当時、長崎に土地勘がなく、「爆心地から2.9キロ離れた自宅で被爆した」と伺っても、それがどんな場所だったのかを具体的にイメージできなかった。昨年9月に長崎放送局に配属され、今年に入って和田さんと再会した際に、自宅があった場所について改めて尋ねると、「長崎市今博多町です。お宅のマンションのベランダから見えるでしょう」と教えてくださった。

和田さんが証言した「火葬場」は、今は公園になり、子どもたちが元気に走り回っている。この平和な空間で、80年前にどれほどの人が苦しみ、息を引き取ったのだろうか。語り継ぐ人や記録に残す人がいなければ、人道上の悲劇はあつという間に忘れ去られ、たった数十年で、「無かったこと」になってしまう。私自身、核問題について地道に取材してきたつもりでも、いまだにほとんどのことを知らずにいるという現実を突きつけられた。

地球市民としてともに考える仲間に

存命する被爆者の数は、全国で10万6825人（2024年厚生労働省発表）で、平均年齢は85.58歳だ。意思疎通が困難になった被爆者や、和田さんのように記憶のない「若い」被爆者もいる。高齢化が進む一方、これだけの被爆者が今もご存命なのだ。被爆者が最後の1人になるまで証言や思いを記録し、伝承していくのが私たちの使命だろう。核兵器を生み出したのは人間なのだから、終止符を打てるのもまた人間であるはずだ。

そして、核兵器に関する議論の中核には、常に被爆の実相があるべきだ。

今月、ともに核保有国のインドとパキスタンで軍事行動の応酬が続くニュースを見て、新幹線で出会ったインドの女性とのやりとりをふと思い出した。彼女は、広島平和記念資料館を訪れ、何を感じたのだろうか。広島で被爆の実相に触れ、これから核兵器とどう向き

合っていくのだろうか。私たちの世代がこれからどんな世界を築いていくのか、地球市民の一員として、ともに考える仲間になってくれたらと願わずにはられない。

(2025年5月)

(本稿の内容は著者個人の見解に基づくものであり、所属する組織を代表するものではない)



被爆体験記

私の被爆体験、黒い雨

迫田 勲

本財団被爆体験証言者

忘れられない記憶

テレビも携帯電話もない時代、標高230mの静かな山の中で突然起った奇怪なことは生涯忘れられない記憶です。後日、その原子爆弾の凄まじい威力、恐ろしさを知りました。

その時（1945年8月6日の朝）、黒い雨に遭う

私達集落の子供8人は学校の命令でムショウ（正式にはアオカラムシ）という草を取っていました。これは食用にもならない、放置すれば、どんどん繁茂し、農地などに侵入してくる厄介な草、1年生の私は一緒に作業をしていた先輩にこれを何にするのですか、聞いたらこの茎を蒸して繊維をとり、乾燥して学校にもって行き、陸軍広島被服支廠と言うところで、兵隊さんの服などの材料にするんだ、と言っていました。（物のない時代、戦争は子供まで駆り出し、草まで利用していたのですね。）

その時、突然南の空がピカーとひかり、ドーンという、地に響くような音がしました。

おじさんが祇園の三菱の工場に爆弾が落ちた、敵が攻めて来る、と言って急いで家に帰り、竹やりを持ちだし、空に構えたこと、爆風で前の山が大きく揺れたように感じたこと、あるおじさんが冠っていた麦わら帽子が遠くに飛んでいったこと、焼ただれた紙や衣類が飛んできたこと、母親が飛んできてそれに触ってはいけんと私を抱きしめたこと、黒煙でダイダイ色、紫色、赤色に変わっていく太陽を見たおばさんが「日輪さんが泣いているようだ、病気になりんさった、これは大事が起った。」と言ったこと、皆な次々と起こる奇怪なことに右往左往しておりました。

そして刈りとったムショウを釜で蒸し終えた11時頃、南の空が真っ黒になり、スス交じりの大粒の土砂振り黒い雨が降り、頭や顔がびしょ濡れになり、白いシャツに黒い斑点が付き汚れました。それが放射性物質を含んだ危険な雨とは知る由もなく、汗と釜の熱で、皆な手を挙げてはしゃいでいました。

〔さこだ いさお〕

1938年生まれ、87歳。7歳の時、爆心地から北西に19km離れた山中で黒い雨に打たれた。2022年、被爆者と認定(77年後)。2000年から田川康介さんの伝承活動、2023年から自身の証言活動を行っている。

この黒い雨の様子は2024年、私の証言に基づき基町高校生の持田杏樹さんが絵にしてくれました。この



“突然降り始めた「黒い雨」にはしゃぐ子供たち～それが放射性物質を含んだ危険な雨とは知らず～”
(制作：持田杏樹(基町高等学校))

絵の中に、何も知らず無邪気にはしゃぐ、自分の姿を見て愛しさを感じます。この8人の内、3人が癌で、他の3人は事故や他の病気で亡くなり、今生

きているのは2人になりました。その当時の子供は（放射性物質の付着した）トマトやきゅうりを丸かじり、空腹をしのいでいました。又、（放射性物質を含んだ）谷や川の水で生活していました。このように、私（達）の体には多くの毒針（と私は言っている）が入っており、それが何時悪さをするか、その晩発障害に怯えております。

私はこのような遠方だったため、火傷や怪我はしておりませんが、65歳の時（黒い雨に遭ってから58年後）突然脈拍が120（普通の倍）になり苦しくなり、又汗が出る、喉が渇く、手が震える等で、緊急入院しました。入院中、10kg体重が減りました。医師から甲状腺障害と診断、その後「終生治療を要す。」と言われ、今も定期的に診察を受け、薬を飲んでます。

証言活動を始めた動機、仲良しであった同級生の死

原爆で両親を亡くし、自身も白血病で苦しみ、心に深い傷、トラウマになっていた親友のY君を見舞いに行った時、初めて、会社を早期退職、入退院、死への恐怖、孤独感等苦悩に満ちた胸の内、原爆の恐ろしさを話してくれました。そして、その3月後、亡くなりました。7歳で知り会い、79歳で亡くなるまで、初め

て聞いた言葉でした。彼は私を呼んだんだ、と思い、この活動をする動機になりました。

原子爆弾（核兵器）の恐ろしさと廃絶、平和への道

原子爆弾は広島や長崎で多くの人が住む街を焼き払い、無差別に多くの人を殺傷しました。しかし、それだけではなく。炸裂時、大量に発生した放射性物質は風に乗って、雨となって野山を越え、19kmもの遠方（実際はもっと遠方）に、そして時を超え、80年経った今でも多くの被爆者を苦しめ、死への恐怖を与え続けています。その場（一地点）、その時（一過性）だけでない、これが原子爆弾の恐ろしいところで

す。原子爆弾は過去ではなく、現在、未来へ続く問題です。そして地球レベルの問題です。真の平和、核兵器廃絶は、現実の世界情勢から、その道は遠く険しいですが ①お互い平和へ強い信念をもって、話し合うこと。国、言葉、文化等は違っても同じ地球に住む同じ仲間、運命共同体。暴漢に襲われた犬養毅元首相は「話せば分かる」と名言を残しています。②私達にできることは先ずは家庭、友だち、学校、職場、地域へと核兵器廃絶の理解、共感の輪を拡げ、世論を醸成することです。③人を大事にすること。それは、他を思い遣る、譲る心を養う「利他」の心だと思います。

黒い雨

原爆の投下後、市内に大火災が発生すると、人々の上に粘り気のある黒い雨が降った。この雨には放射性物質を含むチリやススが混ざっていた。人々は、放射性降下物のガンマ線により外部被曝を生じ、体内に摂取した場合は内部被曝を生じた。現在の広島市域の東側と北東側を除く市域のほぼ全域と周辺部で降ったとされている。



「被爆80周年を契機とした19の取組の展開」 は何が背景となっているのか

谷 史郎

広島平和文化センター 副理事長

本稿では、広島平和文化センターが取りまとめた「被爆80周年を契機とした19の取組の展開」について、その背景となっている重要な視点をご紹介します（文中意見にわたる部分は、筆者の個人的な見解です）。

なお、このビジョンには、「世界平和を象徴する都市“ヒロシマ”として求められる役割を果たすために」という副題が付いています。国内外の多くの「平和を愛する都市や市民」は、非人道的な原爆被害からの復興を遂げ、平和への取組を続けている“ヒロシマ”への共感を示すことで、ヒロシマと連帯して平和を希求していこうとする自らの意思を表明しています（P8 延本充弘氏「世界から見た広島」参照）。この副題は、広島は、そのような平和を象徴する都市として、多くの広島市民の参加をいただきながら、先導する役割を適格に果たしていく考えであるということを表すものです。

このような広島の役割として、大きく二つの取組を示しています。

第一が、「核兵器の廃絶に向けた国際世論の喚起」です。

ここでの視点は、これまで強い説得力を示してきた「人道イニシアティブの議論」を、これからも、あらゆる核軍縮に関する国際的な議論の中心に据えなければならないとするものです。核兵器禁止条約（TPNW）第1回締約国会議の議長を務めたアレクサンダー・クメント オーストリア外務省軍縮局長は、核軍縮にお

ける「人道イニシアティブの議論」の重要性について、「われわれTPNW支持派は、『人道イニシアティブ』という視点を核兵器問題に持ち込み、人道に基づく見解など、さまざまな意見を取り込みながら議論をすることで、より強力な影響を与えることができると証明した。…TPNWが採択される以前、核兵器の人道に及ぼす影響とリスクに関する議論では、核兵器国は大いに苦戦した。…核兵器が人道におよぼす影響とリスクを考慮に入れたうえで、核抑止力の持続性や効果など、より根源的な問題に対処する方が、はるかに難しいからだ。…TPNW採択後、『核兵器の問題を人道的視点から見直すリフレーミング』が不十分だった。TPNW支持派は、再び人道に焦点を当てるべきであろう。」と言及されています。

そして、この「人道イニシアティブ」、すなわち、人類の生存を保障するためには核廃絶しか道はないとする考え方の淵源となっているのは、広島・長崎の被爆体験です。この点、2024年の日本被団協によるノーベル平和賞受賞理由でも、「1945年の原爆投下を受け、核兵器使用がもたらす壊滅的な人道的結末に対する認識を高めようと、たゆまず活動する世界的な運動が巻き起こりました。次第に、核兵器使用は道義的に容認できないと非難する強力な国際規範が形成され、この規範は『核のタブー』として知られるようになりました。広島と長崎の生存者である被爆者の証言は、この大きな文脈の中で唯一無二のものです。」とされています。

一方、戦後すぐアメリカで広く被爆証言活動に従事された谷本清氏は、(広島) ピース・センター構想に関連して、「世界平和に永遠に貢献する方法がわれら自らの被爆体験から展開されなければならぬ。」「われわれには十分なエモーショナル・アppeal (情動的訴え) は持っているものの、それを力強く打ち出す思想的理念を未だ持ち合わせていない。」と記されています。「人道イニシアティブ」は、今や180を超える国家からは是認されている普遍的な考え方であり、まさに谷本氏が必要と指摘された「思想的理念」に当たるものです。

このため、「被爆の実相という事実を『人道イニシアティブ』という理念に結び付け、世界中の市民に核兵器は廃絶すべきとの確信を持ってもらう」という広島の役割は、一層重要性を増しているものと考えます。

第二が、「国内外の若い世代への平和学習」の推進です。

ここでの視点は、広島のみならず、むしろ全国各地域で、被爆者や戦争体験者が非常に高齢化する中、若い世代に対する平和学習の体制整備を急がないと、これらの皆さんが支えてこられた平和を大切に思う精神を各市民社会が保持し続けることが困難になりかねないという危機感です。

もう一点は、平和学習の方法論として、その効果を上げるためには、現場での学習が欠かせないということです。これが、国内外を視野に入れた平和学習の推進が広島の役割となる所以です。50年前に、広島修学旅行の草分けとして尽力された江口保氏の著書で、栗原貞子氏は、「教師たちの現地調査や下見など用意周到な準備とこどもたちの主体的な参加によってヒロシマ修学旅行の一大ドラマが演じられ、生徒たちは参加することによって精神的に被爆し、核の問題を他人ごととしてではなく、自分の問題として捉え、生命や人権、平和の尊さを知るようになったのであった。」とされています。これは、昨年の広島修学旅行アンケート調査で明らかとなった、「広島を訪れるまでは『実感が乏しかった』こどもたちが、『実際に原爆が落とされたんだ』と認識することで、『だとすれば、平和な日常は、当たり前ではなく、大切にすべきものだ』との理解に至る。」という意識変容のプロセスとも通じるものです。

このような中、本年の8月6日前後には、全国のこどもたちの参加を得、広島で2,100人規模の平和学習を展開する予定です。その際、広島への連帯の意思の下、全国から参加いただく100超の平和を愛する自治体の皆さまには、被爆樹木の剪定枝を活用して製作した「平和を刻む時計 (Peace Ticking Clock)」を、ともに平和を希求していく友好の証として、ご用意しています。

さらに、令和10年4月オープンを目途に整備を進めている資料館の「こども向け平和学習展示」に関する議論も始まりました。

最後になりますが、皆さまには、このような視点も念頭に、是非「被爆80周年を契機とした19の取組の展開」をご一読いただけますと、大変ありがたく存じます。



被爆80周年を契機とした19の取組の展開

核軍縮を訴える平和首長会議 代表団の派遣

核兵器禁止条約第3回締約国会議 (3月2日～8日)

ベリット・オーナイ副会長 (ドイツ・ハノーバー市長) を代表として、香川剛廣事務総長 (本財団理事長)、谷史郎本財団副理事長等の代表団を派遣しました。

被爆地の両市長が不在の中、オーナイ副会長は、欧州の危機的状況と900を超えるドイツの都市で構成する平和首長会議の取組にも言及され、世界で最も大きい自治体平和ネットワークとして、説得力を持って対応に当たられました。

核兵器禁止条約第3回締約国会議 (一般討論演説) でのスピーチ

香川事務総長に続き、オーナイ副会長がスピーチを行いました。香川事務総長は、平和首長会議は核兵器禁止条約を極めて重要視しており、日本被団協のノーベル平和賞受賞は、核保有国を含む国際社会全体に「核兵器の使用は決して許されない。」というメッセージを改めて示していると訴えました。続けてオー



オーナイ副会長によるスピーチ

ナイ副会長は、かつてハノーバー市が第二次世界大戦中に甚大な被害を受けたこと、核戦争の危機が高まる中、核兵器禁止条約が核兵器廃絶を達成するための道を切り開いたことなどを述べ、全ての国が本条約を批准し、誠実な対話を通じた紛争の平和的解決へと外交転換するよう各国政府に強く求めました。

国連・各国政府代表者との面会

アカン・ラクメトゥリン核兵器禁止条約第3回締約国会議議長及び核兵器禁止条約締約国であるタイ、メキシコ、アイルランド、南アフリカ、オーストリアの政府代表者との面会を行い、若い世代への平和教育の重要性などについて共通認識を得ることができました。

ICANと共同した平和首長会議主催のサイドイベント開催

約70名の聴衆で、立ち見が出るほどの満員となる中、「核兵器のない世界を求める市民社会の声」と題したイベントをICANと共同で開催しました。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）の中村桂子准教授の進行の下、被爆者代表として、濱住次郎日本原水爆被害者団体協議会事務局次長が自身の胎内被爆やノーベル賞を受賞した理由、核廃絶の必要性について発表し、参加者は心を動かされた様子でした。また、若者からの「若い世代に何を期待するか。」との質問に対し、濱住事務局次長は、「被爆体験の継承は、オンライン証言等も含めて多くの人に聞いてもらい、それを周りの家族や友人に話すことにより世界が広がっていくので期待している。」と若い世代による被爆体験の継承の重要性について参加した若者と共有しました。



サイドイベントの様子

Back from the Brink、ICAN等との共催サイドイベントへの出席

ノースウェスタン大学の宮崎広和教授等が中心となり企画した、都市レベルでの核軍縮のための組織化と政策提唱に関して議論を行うサイドイベントでは、米国の平和首長会議加盟都市の首長らの参加を得て、核兵器が使用された際にターゲットになるのは政府ではなく都市であることから、核廃絶に都市が関わることの必要性等について議論が交わされました。核兵器禁止条約の根拠は「人間の安全保障」であるため、国家間の信頼関係が揺らぐ中、市民の命を守る都市レベルの平和の取組の強化が必要であるとの認識が深められました。この平和を推進する上での都市の役割については、これからも重要な視点にしていきたいと考えます。



共催サイドイベントの様子

また、これに関し、ラクメトゥリン議長に面会した際にも、「市民の平和への意識を高めていく努力を一步一步進めてほしい。」との期待が寄せられました。

平和首長会議原爆平和展、こどもたちによる“平和なまち” 絵画展、VRゴーグル体験

同会議の会期中、国連本部において、会議出席者や国連関係者に理解を深めてもらうため、平和首長会議原爆平和展、こどもたちによる“平和なまち” 絵画展、

VRゴーグル体験を開催しました。特に今回初めてとなったVRゴーグルは、被爆の惨状等をVR映像により疑似体験できるもので、1日当たり約80名が間断なく体験し、「この映像は素晴らしい。」「映像で当時の状況を疑似体験でき、いかに悲惨だったか知ることができた。」「こういう映像は忘れてはならないものだと思う。」など、高く評価する声が非常に多く聞かれました。

第11回NPT再検討会議第3回準備委員会（4月27日～5月2日）

松井一貫^{まつい かずみ}会長（広島市長）、鈴木史朗^{すずき しろう}副会長（長崎市長）、香川剛廣^{かがわただひろ}事務総長（本財団理事長）等の代表団を派遣しました。

今回の準備委員会は、ウクライナでの戦争や中東での紛争が継続する中、来年の再検討会議に向けた最後の準備会合であり、NPTの存在意義が問われているとの危機感が多くの参加者に共有されていました。こうしたことから、被爆の実相を伝え、平和のメッセージを世界に発信する広島・長崎の役割に期待する声が多く寄せられました。

NGOセッションでのスピーチ

松井会長は、被爆から80周年を迎えた現在も地球上に1万2,000発を超える核兵器が存在し、NPTの原則に背く核シェアリングなどが有効であるという考え方が広がっていることは、NPTの原則のみならず、第二次世界大戦後に目指した平和構築体制である国際連合そのものを揺るがしかねない事態であると懸念を表明した上で、平和首長会議は、市民社会の平和意識の醸成と「平和文化」に満ちた世界の創造に向けて全力で取り組む決意を表明し、各国政府代表者に対し、核軍縮・不拡散措置を確実かつ誠実に実行するよう訴えました。



右から松井会長、鈴木副会長

続けて鈴木副会長は、「核兵器は、人間らしく死ぬことも生きることも許さない絶対悪の兵器であり、決して人類と共存できない。」という被爆者の実体験から寄せられた言葉を共有するとともに、戦争被爆地の代表として、「核兵器は決して使ってはならない。核兵器の脅威から人類を守るためには廃絶しかない。」とした上で、「長崎を最後の戦争被爆地に。」と力強く訴えました。

核保有国代表との面会

核保有国であるフランス、米国及び英国の政府代表者に対し、平和首長会議は、市民社会の立場から平和文化の振興を推進し、世界中の首長と共にボトムアップで国レベルの取組を支えていきたいとの考えを伝え

ました。また、NPT第6条に基づき誠実に核軍縮交渉を行うよう要請するとともに、平和首長会議への新規加盟や取組への協力を依頼しました。

国連関係者等との面会

アントニオ・グテーレス国連事務総長は、「自治体は平和に対して重要な役割を担っているのみならず、気候変動、テロ行為など様々な課題に影響を及ぼしており、また文化というものはコミュニティで構築されていくものである。このため、ローカル、地域の力を高めていくことが重要である。私たち国連は、ローカルの声、首長の声をしっかりとし、平和を多くの人々が確信できるよう求めていく必要がある。」と述べました。これに対し松井会長は、「基礎自治体に変な大きな信頼を寄せていただいております、国連と連帯し、ぜひ国連の平和活動の手助けになるような活動をしていきたい。」と伝えました。

また、ハロルド・アジュマン第11回NPT再検討会議第3回準備委員会議長とも面会し、松井会長は、「現在の厳しい国際情勢の中だからこそ、理想を目指し、NPT第6条の誠実交渉義務の徹底について議長に期待している。」と述べるとともに、ガーナにおける平和首長会議加盟都市拡大への支援を要請しました。アジュマン議長は、「私たちの安全保障への取組は急務であり、NPTの枠を超えて、平和の新たな枠組みを再確認する必要がある。また、平和首長会議の行動指針と私たちのそれは一致しており、一緒になって進めていくことが重要である。」と述べ、今後の協力について意見交換を行いました。

国連国際学校（UNIS）訪問

松井会長は、鈴木副会長、平和首長会議ユースと共に、世界の外交官の子どもが通うUNISマンハッタン校を訪問し、講演を行いました。広島・長崎の被爆の実相及び被爆者の平和への願いを原点に活動する平和首長会議の取組について説明し、平和首長会議の取組にぜひ参加してほしいと呼び掛けました。その後、ユース代表がUNIS生徒に向けて、自身の活動や平和への思いについてプレゼンテーションを行ったところ、その完成度の高さからか、傍聴していた生徒たちから大きな拍手が上がりました。

平和首長会議原爆平和展、こどもたちによる“平和なまち” 絵画展、VRゴーグル体験

同会議の会期中、平和首長会議原爆平和展、こどもたちによる“平和なまち” 絵画展及びVRゴーグル体験を開催しました。



VRゴーグル体験の様子

4月28日には岩屋外務大臣が来場され、特に現在約8,500都市が平和首長会議に加盟しているという説明に驚いた様子でした。

平和首長会議ユースの活動

広島県内で平和活動に取り組む高校生8名を平和首長会議ユースとして派遣し、次代の平和活動を担う青少年の育成を図りました。

ユースは、中満^{なかつみづみ} 国連事務次長兼軍縮担当上級代表に対して、約3万4千筆分の「『核兵器禁止条約』の早期締結を求める署名」の目録を手交し、中満次長からは感謝の意が伝えられました。

同準備委員会のサイドイベントとして平和首長会議が開催した「ユースフォーラム」では、平和首長会議ユースや世界各地の若者11組が、自身の取組の発表や若者の役割について意見交換を行いました。参加したユースからは、核兵器に関する問題や社会問題に対し、主体性や当事者意識をもって取り組むことの重要性を改めて認識した、との感想がありました。最後に、中満事務次長から、「若者たちには自分たちの未来のために声を上げる権利がある。それを行使し、自分の意見を遠慮せずに表現してほしい。」と激励の言葉をいただきました。

また、市川^{いちかわ}とみ子^こ軍縮会議日本政府常駐代表との面会では、大使からユースに対し、「軍縮は無視できない課題で、市民一人ひとりが関心を持ち、協調の道を探ることが重要である。若い世代が積極的に国際社会にかかわる姿を期待している。」との言葉をいただきました。

ユースは、その他UNICEF（国連児童基金）、UNDP（国連開発計画）、UN Women（国連女性機関）を訪問し貴重な経験を得ました。



ユースフォーラムの様子



UNDPを訪問する平和首長会議ユース

（平和首長会議・国際政策課）



“私の覚え書き”

世界から見た広島

のぶもと みちひろ
延本 充弘

医療法人社団のぶもと歯科 院長

海外の都市にいくつもの「広島通り」「広島広場」がある。

また8月6日と9日には平和集会、平和ウォークなどの行事が行われていることを広島の人々はほとんど知らない。

ドイツのベルリンの日本大使館前の通りはドイツの救世主のクラークシュペー通りであったが「広島通り」に改名され、それに続く橋は「広島橋」と呼ばれている。

ケルンとドルトムントには「広島・長崎パーク」があり世界初の核被害の表示と折鶴がプレートに刻まれている。近隣の都市よりチャーターバスで集まり8月6日・9日に平和ウォークが行われている。

ポツダムではトルーマン米大統領が滞在した家の前庭に、当時ドイツ滞在外林秀人教授の尽力でできた「広島・長崎広場」に被爆石と共に、「ここから原爆投下の指示が出された」と記した碑がある。ドイツ人にはドイツの降伏が日本より早かったので原爆投下を免れたと思う人もあり、各都市で広島・長崎関連のものは全て議会一致で決まりドイツ人の手で設置されている。

イギリスのロンドンでは8月6日に平和集会、9日にはテムズ川で日本と同じ灯籠流しが行われる。

スペインのアランフェス市には広島の復興に感激した人の提案で新興の街の中心の通りを「広島平和大通り」とした。

カナリー諸島ではNATOの海軍基地設置に市長・議会が反対して、日本国憲法の9条の碑を広島・長崎広場に設置している。

カナダのモントリオールでは300人余りの人が集まり8月6日の平和宣言を日英仏語で聞き鐘をついて平和を祈っている。

オーストリアのウィーンでは広島からの被爆石と千羽鶴と佐々木貞子さんのことが記された碑が当時の駐日大使の提案で設置されている。

一瞬にして人と都市と文化まで壊滅させる核爆弾についての恐怖は皆持っている。

8月6日・9日に海外ではこんなに広島・長崎のことを思って行動をしていることを広島・長崎ばかりでなく、日本の若者たちに知っていただきたい。それは、平和を強く願う世界の諸都市による広島・長崎への共感と連帯を示すものだからである。世界の多くの国の人々の心を、しっかり受け止め、唯一被爆国の若者として今後力強く世界平和のための活動を進めたいと強く願っている。

「ひろしま留学生基金」にご協力を

本財団では、私費で広島に來ている外国人留学生の支援のため、皆様から寄せられた寄附金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、「ひろしま奨学金」を支給しています。しかし、昨今の金利低下等により、財源は大変厳しい状況となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

基金へのご寄附に関するお問い合わせ

(公財) 広島平和文化センター

国際部 国際市民交流課 ひろしま奨学金担当

〒730-0811 広島市中区中島町1番5号

(広島国際会議場3階)

TEL: (082) 242-8879

URL: <https://h-ircd.jp/scholarship.html>



詳細はこちら
(国際市民交流課 HP)

「ひろしま奨学金」とは

広島市内の大学・大学院等に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和63年度(1988年度)より開始し、毎年30人の留学生に奨学金を支給しています。

「広島市・安芸郡外国人相談窓口」 をご利用ください

広島市と安芸郡4町(府中町、海田町、熊野町、坂町)に住む外国人市民のみなさんにご利用いただける相談窓口を開設しています。行政機関への各種届出や困りごとの相談に応じます。

また、相談員が、広島市へ引越してきた外国人市民のみなさんに対し、広島市での新しい生活に関する情報を提供します。

さらに、毎月第2金曜日の午後1時30分から午後4時まで、出入国在留管理局職員による相談(事前予約制)も行っています。

ぜひご利用ください。

【連絡先】

TEL: (082) 241-5010

E-mail: soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場3階 国際市民交流課内

【時間】

月曜日～金曜日の午前9時～午後4時

【対応言語】

スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、英語、フィリピン語(フィリピン語は金曜日と第1・第3水曜日のみ)

※その他の言語については、事前にご相談ください。

【休室日】

祝日、8月6日、12月29日～1月3日



詳細はこちら
(国際市民交流課 HP)